

1. 古戦場エレジー(1)

加来殿山～実相寺山～吉弘神社



現在ルミエールの丘と呼ばれている住宅街の児童公園内に拘留されている黒田如水本陣跡の石碑

海寺のホテル群は家並に隠れて見えなくなっている。ここが本当に西の関ヶ原合戦と言われる石垣原合戦の舞台の時の一方の本陣なのだろうか。

ここから東に緩やかな坂を下りてゆくと200メートルほどでT字路に出る。信号を渡って10メートルほどで、日本山妙法寺入り口の看板があり、そこを入り右側に明豊高校のグラウンドを見ながら登っていくと、実相寺山の山頂になり、白く輝く仏舎利塔がある。この仏舎利塔は1987年に建立された日本山妙法寺の平和記念塔で、今では別府市のラ



実相寺山頂に立つ日蓮宗日本山妙法寺の仏舎利塔

懐かしい別府の街歩きの何処から始めようかと考えたが、やはり今住んでいる場所の近くから始めることにする。

わが家から歩いて10分ほどで加来殿山の小さな児童公園に着く。加来殿山と言っても、その地名を知っている別府市民は少ない。かく言うわたしも今回ゆかりの地名を調べてやっとこの名にたどり着いた。現在、ここはルミエールの丘と言う高級分譲住宅地になっていて、その児童公園に黒田如水本陣跡と言う大きな石碑が建っているのだ。この場所から南を眺めても今では観

ランドマークの一つになっている。実相寺という名前の寺は今はない。火売に曹洞宗の実相寺と言う寺院があるそうだが、地名との関係は分からない。

実相寺の丘は今はゴルフの練習場、パークゴルフ場、野球場、サッカー場などに取り囲まれて、若者の活動の場になっているが、わたしが子どもの頃はここと隣の加来殿山は、藤田観光のゴーカート場や熱帯植物の温室があったが、大部分が雑木林に覆われていて、なんとなく薄気味の悪い場所として敬遠していた。

ここに仏舎利塔が出来た頃は、わたしは地球の裏側にいたのだけど、帰国して仏舎利塔にお参りした時には、古戦場だったことや首実検の場であったことなどから、供養塔として

良いものを建ててくれたと感謝したものだ。

黒田官兵衛（如水）が本陣を張ったのはここだという資料もあるが、わたしもここからの石垣原を見渡すことが出来る眺望と言い、3000人もの兵のための陣張りをする広さと言い、こちらの方が本陣に相応しいのではないかと思う。関ヶ原の合戦は1600年9月15日の一日で決したとされているが、ここ石垣原の合戦はその2日前9月13日に黒田方の勝利で終わっている。14日には黒田如水による首実検がここ実相寺山で行われている。その時に実検



実相寺山頂から大友義統の本陣（オレンジ色の○）の方向を見る。左の○のさらに左側に吉弘統幸の陣所跡がある

された武将は54名の姓名が残されている。もちろんその中でも吉弘加兵衛統幸が筆頭であり、彼の首は直ぐに地元民に下げ渡され、地元民の手で手厚く葬られたという。その墳墓を記す石碑は吉弘神社の境内に今も残っている。

吉弘統幸は柳川藩の大名として有名な立花宗茂のいここにあたり、容姿も性格も通ずるところがあったと言われている。この関ヶ原合戦と言う大友家にとっての天下分け目の関ヶ原は、当主大友吉統の無様な降伏によって、鎌倉以来の守護大名としての命脈を断ち切られることになった正に時代の転換期であったが、統幸、宗茂というふたりの颯爽とした武将の存在がわたしに些かの誇りを覚えさせてくれる。

吉弘統幸は豊後国都甲（現在の豊後高田市）の山城城主・吉弘鎮信の子として誕生。幼名は松市太郎。はじめ統運と名乗り、天正11年（1583年）に統幸と改めた。有名な高橋紹運は伯父であり、その子立花宗茂のいここになる。豊後の国主としての最後の当主である大友義統の正妻の甥でもある。

さらに、元服後の最初の名乗りである統運は義統の統と、これも有名な戸次（立花）道雪の名乗り鑑連の連をもらったも



黒田軍の本陣跡の石碑のある公園から1.2kmほど離れた吉弘神社。吉弘統幸はここに眠っている。

ので、彼の貴公子ぶりを彷彿とさせている。

実相寺の山を下り、左折して400メートルほど下った次の信号を左折、市営のサッカー場や野球場を左に見ながら下っていくと、右手に鶴見病院があり、またT字路の信号に出るが、そこが吉弘神社の裏手になる。お社は小さいながらも手入れが行き届いたきれいな佇まいで、統幸の人柄をしのぶに相応しい。この社の後ろ（西）側に少し離れて、車道に接したところに統幸の首が埋葬された墓所がある。古い石碑と新しい墓石が立っている。

神社の東側は児童公園になっていて、いつ行っても子どもたちの遊ぶ声が聞こえてくるのも、なんとなく心をほぐしてくれるような気がする。統幸がこの地で死ななくてはならなかった

のは、ひとえに愚かな旧主に殉じたからではあるが、この時代以前の武士の人生観、死生観、名誉や意地と言ったものの価値観は、現代の我々とはかけ離れたものだ。れにしても大友家に関係する人物を調べれば調べるほど、統幸が好きになるし、反対に宗麟、義統親子が嫌になる。統幸のいところである立花宗茂の方は、関ヶ原前後の波乱を、紙一重の幸運もあったとはいえ奇跡的に乗り越えて、西軍に付いた大名の中で唯一旧領を回復されている。いとこの統幸は現代の価値観で言えば殆ど犬死に近い形で、この地に命を落とした。そのことを思い、つい統幸が哀れに感じてしまうのは、統幸の時代の士の価値観を否定してしまうことになるのかもしれない。



吉弘神社の神殿の西側に吉弘統幸の墓所がある。右側の石穂には統幸の戦死した9月13日の日付と後ろ側の自然石の板碑が建てられた寛永年間の日付が読めるが、板碑には文字がないようだ。西軍で戦った武将の墓所だから仕方がないか。左の立派な社風の墓石は平成になって、ご親族が建てたもの。